

女性宣教師と女子教育 Women Missionaries and Women's Education in Meiji Japan

石井紀子
ISHII Noriko

ご紹介いただいた上智大学の石井紀子です。本日は明治の近代化という壮大なテーマの中で女性宣教師と女子教育についてのお話をさせていただきます。

明治の近代化は、1853年に鎖国が解かれ、「文明開化」のスローガンのもと、封建体制が解体された社会の大変革を指すが、異文化交流という視点からみると、欧米と日本の知見や文化が交流した躍動的な時代、しかもその中心を担っていたのは将来の日本のリーダーとなる若者たちだったという特徴が浮き彫りになる。日本史の中でも斬新かつ積極的な双方向の文化交流が行われた時代のひとつであった。

欧米の知見が日本に流入した文化交流には大きく分けて二つの流れがあった。日本が主体となって欧米の知見を求めた流れと欧米の方から日本に入ってきた流れの二つである。お二人のご報告を受けて、本報告では、お雇い外国人とは逆の流れ、海外からキリスト教を伝える目的で日本にやってきた女性宣教師と彼らの日本の女子教育への貢献について一緒に考えていきたい。

本論に入る前に、表や地図を4枚ほどお見せして、全体の位置付けの確認を行いたい。

表1は、明治中期1889年までに宣教師が創った代表的な学校名を設立年順に並べたものである。左側に男子校、右側に女子校を並べた。上から順にアメリカ、イギリス、カナダの宣教師、及びフランスのカトリック修道会が創った学校の数と学校名を並べた。表には皆様にわかりやすいように現在の

男子校	26 校	女子校	41 校
アメリカ 明治学院 (1863) 立教学院 (1874) 同志社 (1875) 青山学院 (1883) 東北学院 (1886) 東山学院 (1887) 名古屋学院 (1887) 関西学院 (1889)	23	アメリカ フェリス女学院 (1870) 女子学院 (1870) 横浜共立学園 (1871) 青山女学院 (1874) 神戸女学院 (1875) 同志社女学校 (1876) 立教女学院 (1877) 活水学院 (1879)	34
イギリス 桃山学院 (1890)	1	イギリス プール女学院 (1879) 香蘭女学校 (1887)	2
カナダ 麻布学園 (1884)	1	カナダ 東洋英和女学院 (1884) 静岡英和女学院 (1887)	2
フランス <u>暁星学園 (1889)</u>	1	フランス <u>横浜雙葉学園 (1872)</u> <u>白百合学園 (1881)</u>	3

表1 宣教師によるキリスト教主義中等教育機関
(出典)土肥[1980: 77-80]; キリスト教史学会[2016]より著者作成

学校名を掲げた。実際には複数の学校がやがて統合されてその学校名になっている場合も多数ある。

表1をみると、現存する私立の中等教育機関の名前が多いこと、しかも女子校が多いことが一目瞭然である。もちろん日本お招きくださった立教の立教学院や立教女学院も米国聖公会の宣教師が創った学校である。女子校のリストから、この時期に設立された学校がほぼすべてプロテスタント教派によるものであることがわかる。

フランスのカトリック修道会によるものは下線で示した。カトリック修道会は孤児のための教育など慈善活動からスタートし、外国人子女教育や初等教育にも力を入れていくが、一般の中・上流階級を意識した女子教育への参入は1890年代以降、明治末期に入ってからであった¹。

プロテスタントの場合、アメリカ、イギリスやカナダがあるが、圧倒的にアメリカのことが多い。実際に明治半ばの1890年までにプロテスタントの女性宣教師が開いた女子のミッションスクールは45校に及び、日本の官公立の女子中等教育機関8校の5倍以上に及んでいた²。特に明治初期、最初の10年に開かれた女子校を見ると9校のうち、イギリス系1校を除き、すべてアメリカのプロテスタント宣教師によるものであることがわかる。したがって、明治中期までに絞って考えると、アメリカ女性宣教師が創った女子校が公立の学校や他の国の宣教師の学校に比べても圧倒的に多いことがわかる。そこで、本日は、1870年代から1894年までにアメリカの女性宣教師が行った女子教育についてお話ししたい。

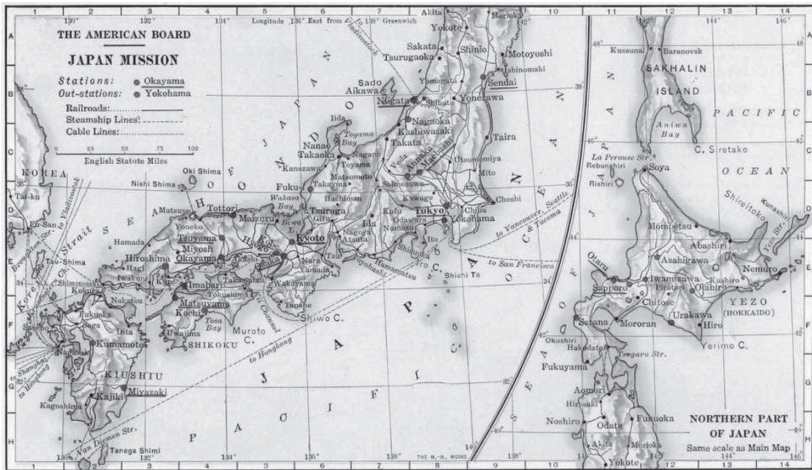


地図1 海外におけるアメリカン・ボードの伝道地域(1813~1869)
同志社社史資料センター提供



地図 2 アメリカン・ボード海外伝道協会 世界ミッション地図 1914 年

"American Board of Commissioners for Foreign Missions : maps of missions,"[n.d.: 18]



地図 3 アメリカン・ボード海外伝道協会 日本ミッション地図 1914 年

"American Board of Commissioners for Foreign Missions : maps of missions,"[n.d.: 24]

まず、世界のプロテスタント海外伝道事業の中で、日本伝道はどのような位置付けにあるのだろうか。1910年にエジンバラで開かれた世界宣教会議の後発行された統計（*World Atlas of Christian Missions, 1911*）によると、1910年現在、世界で宣教活動を行っていた宣教師の総数はおよそ2万人超、そのうち4千人以上と最も多いのがインドと中国、日本は南アフリカに次いで4番目、千人以上の宣教師が来ている。伝道事業の内容を比べると、日本は他に比べて医療事業が極めて少なく、逆に教育事業のうち女子の中等高等教育において生徒数が相対的にかなり多いことが確認できる。

次に地図を参照して確認する。地図1から3は、すべてアメリカで最初に創られた海外伝道組織、アメリカン・ボード海外伝道協会（以下「アメリカン・ボード」と略す）の地図である。地図1は同志社社史資料センターにご提供いただいた。矢印をたどると、本部ボストンから世界のどこに派遣されたかがよくわかる。地図2と地図3は1914年アメリカン・ボードが海外伝道のために実際に使っていた地図である。少し見えづらいが、宣教師が派遣された伝道地に黒い印が入っている。

明治と女性宣教師

なぜ明治草創期にアメリカ女性宣教師が創った学校が多かったのか。結論を先取りするならば、その時期はアメリカ女性による海外伝道の最盛期にあっており、同時に日本では教育の近代化が進められる中、ちょうど女子の中等教育の分野が手薄だった時期にあたっていたからである。そこで女性宣教師は伝道のひとつの手段として女子教育を始めると、日本のニーズに合わせてその方針を調整せざるを得なくなったのであった。その結果、1870年代には伝道中心だった宣教活動を1880年には教育中心にシフトさせ、やがて本国の宣教思想の転換を導くことになった。宣教師はキリスト教を伝えるために日本にやってきたが、周知の通り、日本は宣教師の意図に反して、キリスト教国にはならなかった。最新の2016年のデータでもクリスチャンは日本の全人口の1%に満たない³。したがって、改宗率だけをみれば、日本伝道は失敗だったと言わざるを得ない。

しかしながら、たとえキリスト教国にはならなかったとしても、明治草創期にアメリカ女性宣教師が創った女子校が現存し、特色のある教育を行っていることを考えると、宣教師による海外伝道は改宗率だけでは評価できない、あるいは1970年代に流行したように文化帝国主義と単純に断罪できるものでもないことがわかる。実際近年では、もっと複雑な文化交流史、一國史を超えるトランスナショナル・ヒストリーとして見直されるようになってきた。そこで、なぜこの時期にアメリカ女性の海外伝道熱が高まったのかという問題を19世紀アメリカ史に照らして考えたい。その中で、アメリカ女性の海外伝道を支えた基軸概念となった「クリスチャン・ホーム」について整理する。そして最後に日本側の事情として近代化が進められ、やがて国家主義の高まりがみられる中、宣教師がその伝道活動を維持するために女子教育の充実を図らざるを得なくなったこと、またその結果、日本女性には一夫一婦制に基づく「クリスチャン・ホーム」の概念や社会改革の精神が伝わったことを指摘したい。

19世紀アメリカ女性と海外伝道

そもそもなぜこの時期にアメリカ女性の海外伝道熱が高まったのだろうか。アメリカ史に照らして考えると、三つの要因が考えられる。一つは1780年ごろから1840年ごろにかけて全米に広まった第二次信仰復興運動に付随して世界に福音を広めたいとする宗教的情熱が高まったことである。

アメリカ史のひとつの特徴は周期的にリバイバルが繰り返される点であるが、多様な歴史や宗教的信条を持つ移民が流入するアメリカでは、アメリカをアメリカたらしめているのは神の前で平等であることを確認できる、正にこのリバイバルである、とも分析されている⁴。

海外伝道熱を後押ししたもう一つの重要な要素は18世紀以降アメリカに浸透したポスト・ミレニアリズムの終末論である。ポスト・ミレニアリズムとは千年王国が到来した後にキリストの再臨があるとする考えで、その実現のために人間の努力の余地を認めている。

第二次信仰復興運動にポスト・ミレニアリズム、さらに人間の努力の介入

を認める考えが結びついたことによって、人間の努力によって全世界に福音を広めればキリストの再臨は実現できるとされ、これが海外伝道熱を後押しすることになった。折しもアメリカ国内では19世紀初めにナポレオンからルイジアナを購入して以来、西へ西へと領土が拡大し、19世紀末にフロンティアラインが消滅したと発表されるまで、西部開拓が進められていったわけだが、そのプロセスにおいて、先住民であったネイティブ・アメリカンにキリスト教を伝える国内伝道が進められていった。

同時に、キリストの再臨を望むプロテスタント教会は、海外の異教徒にも福音を伝えようとする海外伝道熱に掻き立てられ、1810年に通称アメリカン・ボードと呼ばれるアメリカで最初の海外伝道組織を結成した。これはやがて会衆派の組織となり、アメリカでは教派別に海外伝道団体が組織化されていくことになる。

実はキリスト教の国内、海外伝道の拡張は、アメリカ合衆国の帝国の拡大と一致していた。西部開拓とともに国内伝道が繰り広げられ、1898年にハワイが併合され、アメリカが米西戦争に勝利したことによってフィリピンやプエルトリコが併合される等、アメリカ帝国は北アメリカ大陸を越えて、太平洋、カリブ海に進出した。その世紀転換期にアメリカのプロテスタント教会の海外伝道は最盛期を迎えることになった。さらに特筆すべきはそのピークはアメリカ女性の海外伝道の最盛期と一致しており、アメリカの歴史学者のパトリシア・ヒルが指摘したように、女性たちの貢献によってアメリカの海外伝道は牽引されたといっても過言ではない。ヒルの研究によれば、世紀転換期の20年間に300万人のアメリカ女性が海外伝道事業に動員され、それまでのアメリカ女性の社会運動としては最大規模を誇るものとなった⁵。

それではなぜ女性と伝道が結びついたのか。それは東海岸において産業革命が進展すると、19世紀初頭、北部白人社会では農村を中心とするピューリタンの家父長制社会が解体し、都市化、産業化とともに中産階級が形成され、家庭の在り方と女性の果たす役割に変化がみられるようになった、というジェンダーの変化に関係がある。それまで農村社会では生産と生活の場が一致していたのが、産業化によって生産と生活の場が分離し、生産を担う男は工場等外の領域に働きに出るようになり、女性は生活の場である家庭の領

域を守って家事育児を担うようになった⁶。このように19世紀に形成された白人中産階級女性のジェンダー、つまり期待された女性像が二つ目の要因である。

このジェンダーでは、女たちには敬虔、純潔、従順、家庭性の4つの美德が期待されるようになり、その中でも社会が悪に染まっていく中、敬虔の美德を推進し、社会の「道徳の守護者」として宗教をつかさどることが最も崇高な役割として女に期待されるようになった⁷。ここでは、紙幅が限られていることからこのあたりでとどめておくが、白人女性に期待されたこの新しいジェンダーにより、アメリカでは矛盾に満ちた民主主義が維持され、女性には参政権のように公式に政治参加をすることが否定されていたにもかかわらず、「共和国の母」として間接的に政治参加することや、宗教の名のもと、「道徳の守護者」として社会に働きかけることが許されるようになったのである⁸。この「道徳の守護者」の概念によって、女性たちの中には、宗教を根拠に奴隷制廃止運動や禁酒運動などの社会改革運動に駆り立てられていくものもあった。

「クリスチャン・ホーム」——女性の海外伝道の基軸概念

こうしたジェンダー概念に照らすと、実はキリスト教の伝道活動はまさにキリストの福音を世界の異教徒に伝える仕事であるがゆえ、当時のジェンダーにぴったりと合致するものであった。女性たちは男たちに咎められることなく、宗教の名のもとに、堂々と本来なら女だけで出かけられないような異国の地に出向いて、自分たちの考える伝道事業を行うことができたのである。

したがって、海外伝道が始まった19世紀前半、女性たちはまずは宣教師の妻として海外伝道に赴いた。アメリカン・ボードをはじめ、最初に創られた海外伝道の団体は男性主導の団体で、ボードから任命されると男性の宣教師たちは出発前に敬虔なクリスチャンの女性と結婚し、ほとんどが妻を伴って海外の伝道地に赴いた。それは宣教師の健康を支えるためでもあったが、最大の理由は、異教徒に対して「クリスチャン・ホーム」のロール・モデル

を示すことによって、福音を広める効果をあげるためだった⁹。この点がカトリック教会の宣教活動との大きな違いである。「クリスチャン・ホーム」とは愛によって結ばれた一夫一婦制の温かい家庭を意味した。聖書によれば神の前で男女は同じ人間として平等である。その理念によって互いに愛と敬意をもって結ばれた一組の夫婦が明るい日差しにゆれる、掃除の行き届いた家庭できれいな衣服をまとった子供たちと一緒に食事をしながら談笑する。子供たちは敬虔なクリスチャンの母に育てられ、自然に自己規律を兼ね備えるようになる。こうした「クリスチャン・ホーム」の姿こそが、世界の異教徒たちにもっとも恐怖心を与えない、福音のメッセージとして伝えられると考えられ、女性の海外伝道の基軸概念として使われていった。

宗教学研究者のダナ・ロバートの研究によれば、クリスチャン・ホームの概念は1836年に初めてアメリカン・ボードの幹事のアンダーソンが用いてから1938年にインドのマドラスで開かれた国際宣教会議の議事録にまで記録されていることにより、実に100年以上にわたって海外宣教の礎石となったと指摘されている¹⁰。そしてまさにこの「クリスチャン・ホーム」の概念が女性宣教師と女性宣教師が創った学校によって、日本女性にも伝えられていくことになった。

このように19世紀前半、女たちは宣教師の妻として海外伝道に赴いた。しかし、初期の宣教師の妻たちは慣れない異国の気候や風土で疫病にかかり、夭折するものも多く、そうした姿は「悲劇のヒロイン」として海外伝道に関する広報誌に描かれ、全米の教会のアメリカ女性の間にある種、アイドルのような憧れの存在として広められていった¹¹。

こうした中、アメリカでは南北戦争が起こり、アメリカの歴史上、本土で最も死傷者の多い戦争となる。この南北戦争で多くの女性が傷病兵の看護にあたり、女が組織化すれば、社会に貢献できることを経験する。さらに北東部ではすでに19世紀前半にマウント・ホリヤーク・セミナリー等、最初の女子中等教育機関が創られていたが、南北戦争が終わると、ウェルズレーをはじめ、次々と女子大学が創設され、女子セミナリーとして開校していた学校も女子大学に発展していった。

このように女による組織化の経験と女子高等教育の息吹がみられたといっ

た条件が整う中、海外の伝道地から独身の女性宣教師を派遣してほしいとの要望が送られてきた。アメリカの宣教師の記録に残されている最も古い事例は、中国にいた男性宣教師、デビッド・アビールが1834年にイギリスとアメリカでスピーチを行い、中国伝道が成果を挙げない理由は中国女性に男性宣教師が接触できないからだ、家事育児に追われない独身の女性宣教師の派遣が急務であると訴えたことだった¹²。この要望に応じてまずイギリスで女性の団体（Society for Promoting Female Education in the East）が組織化され、アメリカでは1861年に超教派の女性の海外伝道局が結成され、南北戦争後、次々と教派ごとの女性による海外伝道局が結成されていく。こうした女性海外伝道局の組織化によって女性たちは自ら海外伝道の資金集め、広報活動、および人材のリクルートを行い、多くの独身女性宣教師を海外に派遣していくようになる。これが三つ目の要因である。

このように現地からの要請に応えることによって、「女性のための女性の仕事」という女性の海外伝道を支える思想が形成された¹³。それは海外の異教徒の地では、たとえばトルコのハーレムやインドのゼナーナのように数多くの女性が男性の宣教師が足を踏み入れることのできない空間に隔離されており、そうした女性に接近するためには、家事や育児に追われない、独身の女性宣教師を派遣するしかないという考えだった。つまり宣教師たちの目に映った伝道地のジェンダー規範により、アメリカの独身女性宣教師の海外伝道を支える思想が形成されたのである。中国やインドで海外伝道に苦勞していた男性宣教師たちも、現地の女性たちに福音を伝えることができれば突破口になるかもしれないと考え、女性の海外伝道局の結成と独身女性宣教師派遣に強く賛同した。このように現地の宣教師の要請によって1868年以降、教派別に女性の海外伝道局が次々に設立されたことにより、しっかりした組織的基盤と女性ネットワークに支えられ、アメリカ女性の海外伝道への参入が急速に拡大していった。このような背景のもと、1869年アメリカの最初の独身女性宣教師としてメアリ・E・キダーが来日し、翌1870年最初の宣教師の女学校フェリス・セミナリーが開設された。

女性宣教師と日本伝道

最後に、日本側の事情と女性宣教師の対応、そして日本女性に伝わった考え方について考える。なぜ明治草創期に、アメリカ女性宣教師が創った学校の数が多かったのだろうか。

その理由は、歴史的偶然にある。明治初期、政府は「文明開化」のスローガンの下、いち早く近代化を遂げるために近代的な教育制度を整備することを重視していた。お雇い外国人の知見を取り入れながら、中央集権的な教育制度を創り、全国に教育機関を設置し、6歳から14歳までの8年間については、国民皆学の方針で小学校教育を定めた。ところが、教育制度の近代化を急ぐあまり、男子教育が優先され、女子教育については中等教育がすっぱり抜け落ちていたのである。つまり、女性は教師に向いているというお雇い外国人マーレーの進言により、1874年に小学校教師を養成する東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）の設置が定められてから、1899年に高等女学校令が公布されるまでの25年間、女子の中等教育については法整備がなされず、ごく少数の熱心な女子生徒がたまたま女子を排除しなかった中学校に通った例外を除くと、女子は中等教育を受けることができなかった。実際日本社会では女子は子守としての労働を期待されている場合が多く、明治初期においては女子の小学校への就学率は男子の6割に比べ、1、2割と低迷していた。したがって明治政府による女子教育が一部抜け落ちた中途半端な状況であったのも、あながち不自然なことではなかったといえよう。

一方、アメリカから伝道地に赴任する女性宣教師は、男性の宣教師と異なって牧師の資格を持たなかったので、海外の伝道地で現地の女性に接近するための手段として教育や医療伝道を手掛けていた。鎖国を解き、欧米の文明を積極的に取り入れようとする日本は宣教師からみればキリスト教を伝える希望に満ちた新天地と映り、1869年のキダー以来、数多くの独身女性宣教師が派遣される。先述のとおり、1874年から1899年の25年間のタイミングは、偶然アメリカで独身女性宣教師による海外伝道の最盛期に当たっていたのである。

こうして文明開化の下、外国人居留地が建設された開港地を中心に次々と

宣教師の女子校が創られていった。折しも明治維新からまだ日が浅かったので、貧乏で教養の高かった没落士族が新しい時代に巻き返しを図るために妻や子女を宣教師の女子校に送り込み、英語や西洋の知識を学ばせた。このように明治初期においては没落士族の需要があり、地元の知事や元藩主等、日米双方の経済的支援を得て開校する例もあり、女性宣教師による女子校の滑り出しは順調だった。ところが、日本における医療伝道は中国に比べ、不振だった。例えばアメリカン・ボードの日本伝道事業の中では、同志社医学校の構想がすすめられ、京都看病婦学校が設置されたものの、1880年代に政府によって樹立された東大ドイツ医学による医療制度が大きな壁となり、宣教師による医療事業としては存続できなかった¹⁴。

日本伝道の活路であった女子教育においても、やがて宣教師は日本側のニーズはキリスト教よりも英語や西洋の知識の修得にあることを感じ取っていく。私が研究した神戸ホームでは結局内部分裂し、伝道重視の初期の宣教師は神戸ホームを離れ、女性伝道者を養成する神戸女子神学校を設立し、教育重視の宣教師は1879年神戸ホームを英和女学校と改称し、カリキュラム改革を行った。さらに高等科を設立することに奔走し、ついに1894年神戸女学院（英語名 Kobe College）となった。彼女たちの考えた高等教育を実現し、自前でミッションスクールの教師を養成できるようにしたのである。これは、教育はあくまでも伝道の手段とみなし、伝道重視の立場をとっていたアメリカ本国の伝道方針とは相いれないものだった。ところが1880年代半ばごろから、大日本帝国憲法の起草とともに天皇制確立の社会風潮が高まると、一般大衆の中でも反キリスト教の風潮が再燃し、神戸女学院でも1894年に生徒数が最盛期の半分に減る危機に見舞われる。こうした事情にさらされ、女性宣教師として伝道活動を維持するためには女子教育の充実を図らざるを得なくなり、現地の事情を知る男性宣教師の支援も得て、女性宣教師は本国の女性海外伝道局とアメリカン・ボードを熱心に説得した。そして遂に本国ボードの許可を得る。その後も女性海外伝道局や同窓会から全面的資金援助を得て、キャンパス移転を含め、さらに高等教育を充実させていった¹⁵。

これが実現できたのは、マウント・ホリヤークやウェルズレーといった当

時のアメリカ女性としては高学歴のカレッジ卒第一世代の宣教師が担ったからでもあったが、現地のニーズに対応するために伝道から教育へ宣教活動をシフトさせ、それを本国のボードと交渉したことにより、やがて本国の宣教思想も伝道から教育へ転換させていったからであった。宗教史学者ロバートの研究によれば、アメリカ女性の海外宣教では、現地のニーズにより、メソジスト等他の教派でも 1880 年代から同じように、教育中心へ宣教思想が転換した¹⁶。よって女性宣教師は牧師の仕事から排除されていた故か、現地の要請に敏感に反応し、自分たちの伝道活動を維持するために宣教の思想を変容させていく柔軟性があったのではないかと考える。その結果、たしかに日本はキリスト教国にはならなかったにもかかわらず、女性宣教師が創った女子中等教育機関が多数現存し、たとえクリスチャンにならなくても卒業生の間に継承されている女性宣教師のメッセージがあるのではないだろうか。

最後に教育の効果をみるために、卒業生のその後について一言紹介したい。明治初期は人数も少なく、宣教師と寄宿舎で生活を共にしていることもあり、受洗率は高く、牧師や教師の妻になるものが多かった。しかし、国家主義の高まりがみられる 1890 年から 1909 年までの 20 年間の卒業生をみると、概ね現代の中学高校にあたる普通科の卒業生のべ 359 名と大学にあたる高等科の卒業生のべ 67 名ではその傾向が異なってくる。普通科の卒業生は受洗率が 6 割に下がり、教師や牧師の妻になるものはおよそ 1 割、官吏、会社員や医師の妻になるものが 4 割近くおり、西洋の知識や英語力を求めて入学し、当時のエリートになる傾向がみられるが、高等科の卒業生は受洗率が 9 割、6 割が教師になり、3 割が牧師や教師の妻になり、反キリスト教の風潮が高まっているにもかかわらず、宣教師の望む人生を歩む卒業生が多い¹⁷。ここでは紙幅の制約から割愛するが、個別の卒業生の生き方を調査すると、卒業生の間に継承されている女性宣教師のメッセージは一夫一婦制に基づく「クリスチャン・ホーム」の概念と自己規律のある人間として社会改革の精神を保っていることだと考えている¹⁸。

以上、明治の近代化における女性宣教師と女子教育の問題について考えてきた。明治初期という躍動的な時代に繰り広げられた草の根の日米の女性の

文化交流の物語だが、アメリカ女性宣教師が草創期の女子教育に大きな貢献を果たすことができたのはアメリカ女性の海外伝道の最盛期と日本側で女子中等教育が手薄だった時期が一致したことと、牧師の資格を持たない女性宣教師が現地のニーズに合わせて宣教思想を柔軟に変容させ、女子教育の充実を図ることができたからと言えるだろう。

註

1. 川村 [2016]
2. 桜井 [1943: 82-92]
3. キリスト教年鑑編集委員会 [2016: 42]
4. 斎藤 [1997]、森本 [2006]
5. Hill [1985: 3, 23]
6. Cott [1977]
7. Welter [1966]
8. Kerber [1986]
9. Robert [1998: 65-75]
10. Robert [2008: 134-35]
11. Robert [1998: 39-51]
12. Davis [1926: 4-5]
13. Robert [1998: 130-37]
14. 小野 [2004]
15. Ishii [2004]
16. Robert [1998: 128-88]
17. Ishii [2004: 145-70, 189-92]
18. 石井 [2011]

参考文献

- “American Board of Commissioners for Foreign Missions : maps of missions,” American Research Institute in Turkey, Istanbul Center Library, online in Digital Library for International Research Archive, Item #11178.
<<http://www.dlir.org/archive/items/show/11178>> [Accessed January 29, 2017]
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: “Woman’s Sphere” in New England, 1780-1835*. New Haven & London: Yale University Press, 1977.
- Davis, Grace T. *Neighbors in Christ: Fifty-Eight Years of World Service by the Woman’s Board of Missions of the Interior*. Chicago: Woman’s Board of Missions of the Interior, 1926.
- 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社, 1980年。
- Hill, Patricia R. *The World Their Household: The American Woman’s Foreign Mission Movement and Cultural Transformation, 1870-1920*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1985.
- Ishii, Noriko. *American Women Missionaries at Kobe College, 1873-1909: New Dimensions in Gender*. N.Y. & London: Routledge, 2004.
- 石井紀子「プロテスタント女性宣教師のアメリカ的背景と明治日本の二人のビューリタン女性」上智大学アメリカ・カナダ研究所編『キリスト教のアメリカの展開——継承と変容』上智大学出版, 2011年, 157-182頁。
- 川村信三「近代日本のカトリック史とカトリック教育」キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館, 2016年, 163-184頁。
- Kerber, Linda K. *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America*. N.Y. and London: W. W. Norton & Co., 1986.
- キリスト教年鑑編集委員会編『キリスト教年鑑 2016年版』キリスト新聞社, 2016年。
- キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館, 2016年。
- 森本あんり『アメリカ・キリスト教史——理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社, 2006年。
- 小野尚香「医療宣教師ベリーの使命と京都看病婦学校」同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師——神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』教文館, 2004年, 272-297頁。
- Robert, Dana L. *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice*. Macon: Mercer University Press, 1998.
- . “The ‘Christian Home’ as a Cornerstone of Anglo-American Missionary Thought and Practice,” *Converting Colonialism: Visions and Realities in Mission History, 1706-1914*, ed. Dana L. Robert. Grand Rapids & Cambridge: Wm.B.Eerdmans Publishing Co., 2008: pp. 134-165.
- 斎藤眞「アメリカ革命と宗教——文化的多元性・政教分離・統合」森孝一編『アメリカと宗教』日本国際問題研究所, 1997年, 63-94頁。
- 桜井役『女子教育史』増進堂, 1943年。
- Welter, Barbara. “The Cult of True Womanhood, 1820-1860,” *The American Quarterly* 18.2 (Summer 1966): pp. 151-74.